
天使のおくりもの

北上緑良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使のおくりもの

【Nコード】

N1558M

【作者名】

北上緑良

【あらすじ】

天界にいる天使たちの仕事は、“魂”を天国・地獄に連れていくこと。そして“魂”の行き先を決めてあげること。それだけのはずの天使の日常(?)は、突然の天界への来訪者によって崩れることに…。

1 来訪者

人間の寿命は予め決まっている。

寿命が途切れる頃、天界からの使い　つまり、天使　が“魂”を迎えに行く。

“魂”の行き先は、生前の行いを元に予め決まっている。

天使の仕事は、“魂”達を天国又は地獄の入口まで案内すること。

そして、行き先を断定し切れなかった“魂”達を、天界の裁判所へ連れて行き、行き先を決めること。

そう、全ては決められたことを決められた通りにこなせば良かったのだ。

“あの女性”^{ひと}が来るまでは。

ここは天界裁判所、の上階にある一室。

ここの裁判長を務めるアランは、ゆったりとしたソファに腰掛け、机上に広げられた資料を一枚一枚丁寧に確認していた。

裁判の対象となる“魂”はそうそう頻繁には現れない。大体が、生前に悪事も善事も行ってしまった者である。アランの手元にある資料は、これからその裁判の対象となる“魂”達の詳細が書かれてい

た。次の裁判は6時間後。それまでは暇を持て余すことになるので、資料の整理にゆつくり時間をかけることで時間を潰していた。

他の裁判員達は、普段は『案内』の仕事をしているが、裁判長となってしまうとそうもいかない。幸いアランが裁判長になってから出くわしてはいないが、緊急事態のため、裁判長は常時滞在を義務付けられていた。

いい加減この大量に与えられた時間にも飽き、アランが軽いため息をついた直後、部屋のドアが大きな音を立てて開いた。

「裁判長っ！！」

ドアを開けた張本人は、ノックするのを忘れたという失態にも気付かないくらい動転していた。

「どうした、ルイ。変なモノでも現れたか？」

あまりにその少年 ルイの慌てぶりに、アランも彼の失態を叱責するよりも先に、落ち着かせることを優先した。ソファを立てルイに近づくと、彼はがっしリアランの腕を掴んだ。

「それが現れたんです。至急天界門へ。」

今度はアランが慌てる番だった。ルイはアランの腕をしっかりと掴むと、脱兎の如く走り出した。

「あのさ、羽根使えよ。」

「すみません、…裁判長。慌てたもので…」

アランを連れてきた張本人、ルイは全く謝る気のない棒読みの返事を返してきた。全力疾走したお陰で、まだ肩で息をしていた（アランはこっそり羽根で浮いた状態になって引っ張ってもらっていた）

「こちらです。」

ルイは目の前の大きな門　天界門を勢いよく開いた。

天界門は、名の通り天界への門。天界の唯一の出入口である。ある意味天国と地獄の中立的な存在である天界は、どちらからも干渉を受けぬようにするため、天界に関わる者の仲介がなければ門に辿り着くところか見ることすら出来ない。つまり、天使に連れてこられなければ、“魂”は天界門を認識することは不可能である。

そのはずだった。

門の向こう側にいたのは、女性だった。

胸下まで伸びた真っ黒な髪と、真っ黒な瞳。肌の色や目鼻立ちからして東洋の人間であることは間違いはなかった。ただ、天使特有の白装束は着ておらず、オレンジのＴシャツに黒のジャージという、いかにも寝間着という姿。

“魂”は、基本的に死ぬ直前の姿で連れられてくるのだ。もちろん天使によって。

「ルイ、お前が連れてきたわけではないよな？」

「裁判長呼びに行くまで俺は１２時間前からここから一步も動いてません。」

「そりゃ門番だもんな。」

「そうですよ。」

案内の仕事から戻ってきたルイに、１２時間前に門番の仕事を言いつけた張本人はアランである。

目の前にいる女性を連れてきたと思われる天使は、２人が確認する限り、どこにも見当たらなかった。

「担当が放置した可能性は？」

「いえ、あの女性が１人で突然現れました。」

天使によって天界に連れてこられるはずの“魂”。
その“魂”が連れの天使がいない状態で、門の前をうろついているのは、確かに緊急事態だった。

「迷子って訳ではないんだよね？」

「迷子なだけだったら門開いた音に反応してませんから。」

そう、天使の仲介がなければ認識できないはずの天界門の開く音に、その女性は反応していた。門が開いた瞬間から、彼女は2人を興味深げに見つめていた。

「ねえ、あたしいつまでここにいればいいの？」

いつまでもこそこそと話している2人に痺れを切らしたのか、彼女は笑顔で話しかけてきた。
その笑顔に少しだけ、寂しさが混じっていたのを、アランは見逃さなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1558m/>

天使のおくりもの

2010年10月20日13時09分発行